

子宮がん検診の勧め

山陰労災病院 産婦人科

子宮がん検診を受けていますか？

検診は自覚症状が無い時点で行われることから、
がんが進行していない状態で発見できます。

検診を受けて自分の身体と健康のこと、見つめ直して見ませんか？



子宮がん検診

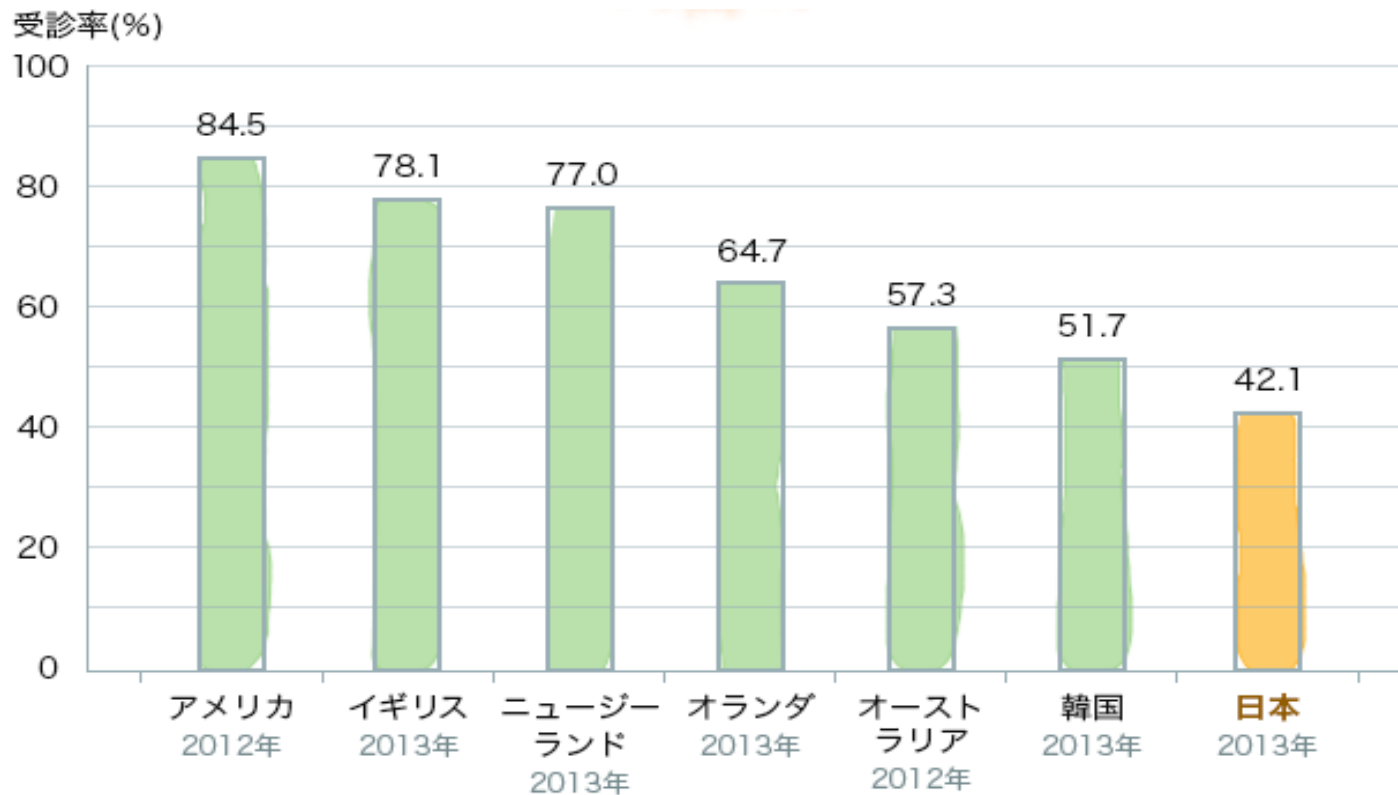
子宮がん検診では以下の診察を行います。

- ①問診 : 問診票に、月経周期や直近の月経の様子、生理痛の有無や月経血量、妊娠歴、閉経した年齢などを記載していただきます。また診察室で医師が質問することもあります。
- ②視診 : 婦人科診察台で診察します。子宮頸部を観察し、おりものの状態や炎症の有無を目で確認します。
- ③子宮頸部細胞診 : ブラシなどを用いて子宮頸部の表面から細胞をこすり取ります。その細胞を顕微鏡で調べます。
- ④子宮体部細胞診 : 必要な場合のみに行います。子宮内部に細い棒状の器具を挿入して細胞をこすり取ります。その細胞を顕微鏡で調べます。
- ⑤経膈超音波検査 : 子宮および卵巣の大きさや性状を確認します。子宮筋腫や卵巣腫瘍が見つかることがあります。



諸外国の子宮がん検診受診率

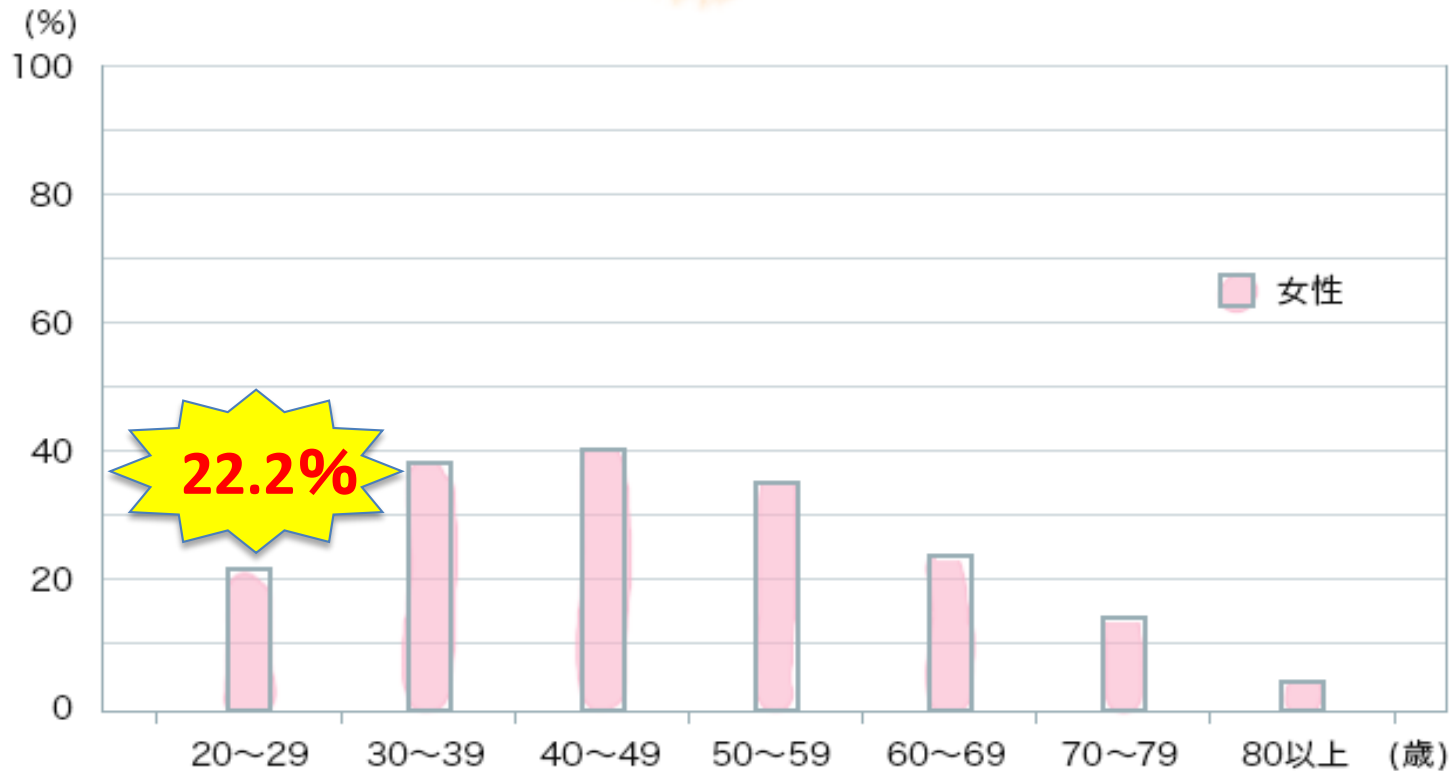
20～69歳の子宮頸がん検診受診率を比較しています。
欧米では子宮頸がん受診率が70%以上を達成しているにもか
かわらず、日本はその半分ほどの値にとどまっています。



(資料: OECD Health Data 2015)

日本の子宮がん検診受診率

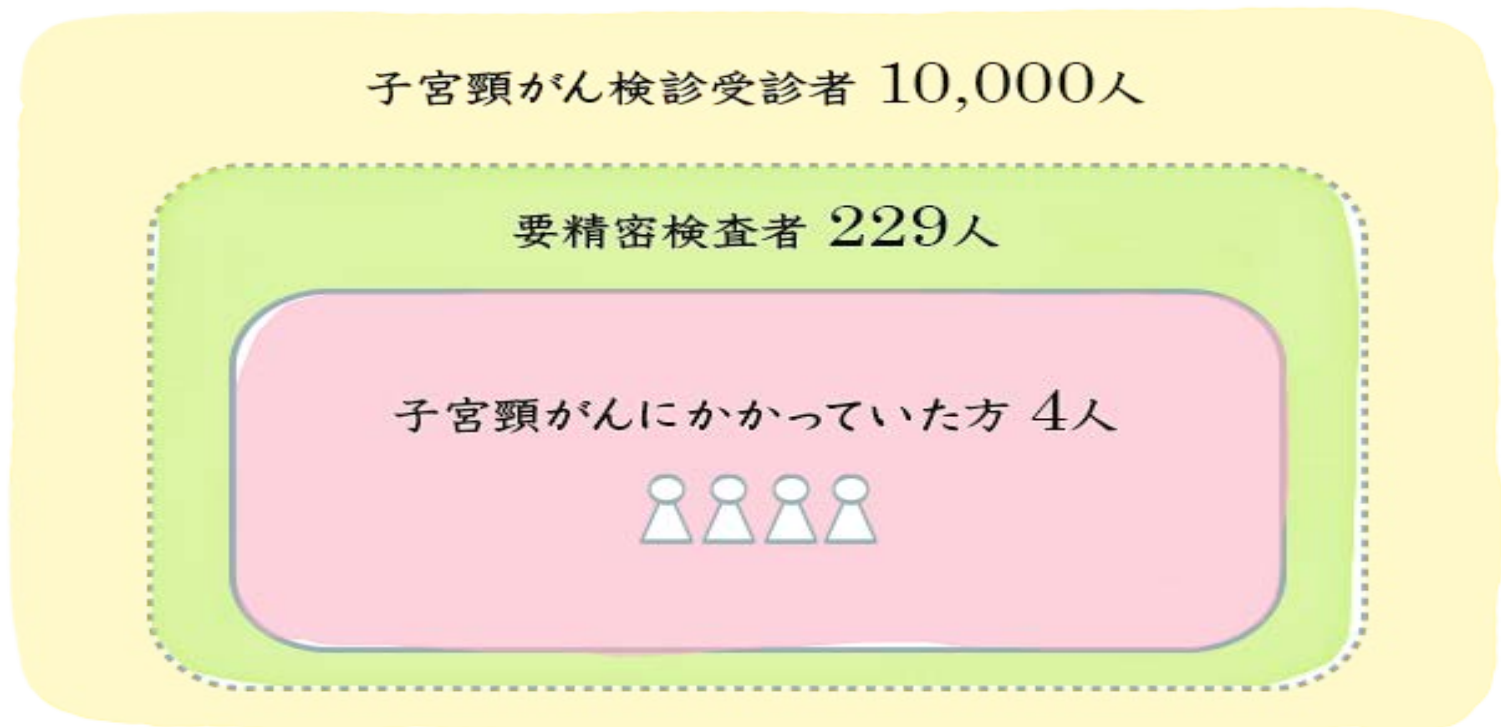
子宮頸がん検診は20歳から受診対象となっていますが、20歳代の検診受診率はわずか22.2%です。



(資料:厚生労働省 平成25年国民生活基礎調査)

子宮がん検診によるがん発見データ

平成26年度に子宮がん検診を受けた方は4,199,634人でした。
受診者のうち2.29%(96,175人)が要精密検査となり、
要精密検査者の1.86%(1,785人)に子宮頸がんが発見されました。

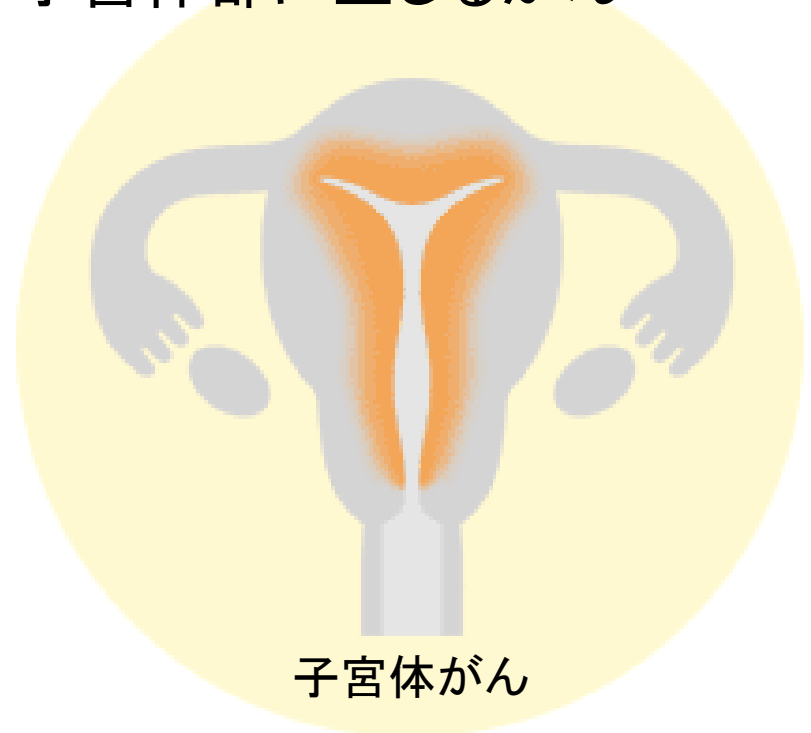
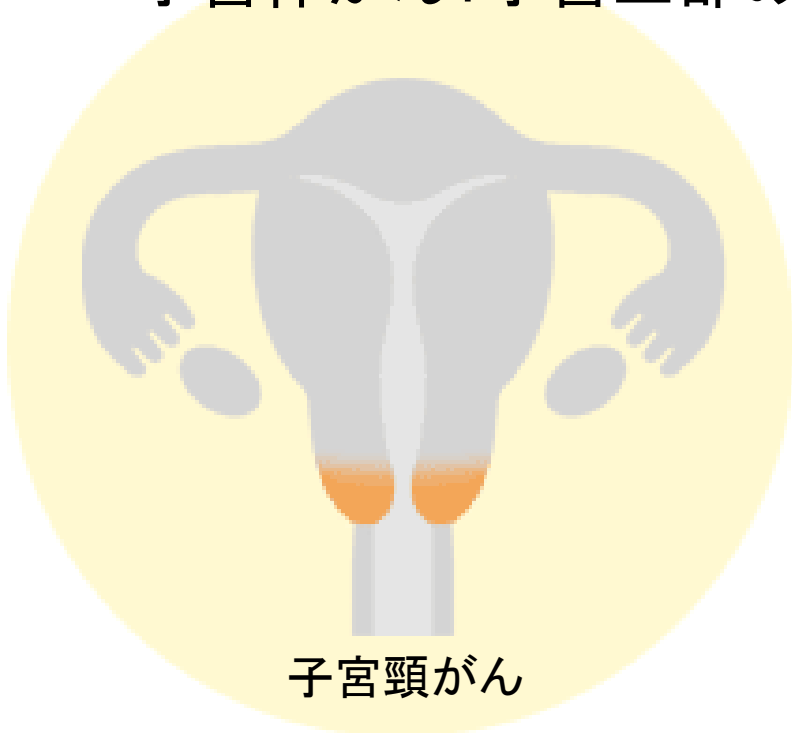


(資料:厚生労働省 平成27年度地域保険・健康増進事業報告)

子宮頸がんとう子宮体がん

子宮がんは子宮頸がんとう子宮体がんに分けられます。
様々な特徴が異なります。

子宮頸がん: 子宮下部の管状の子宮頸部に生じるがん
子宮体がん: 子宮上部の袋状の子宮体部に生じるがん



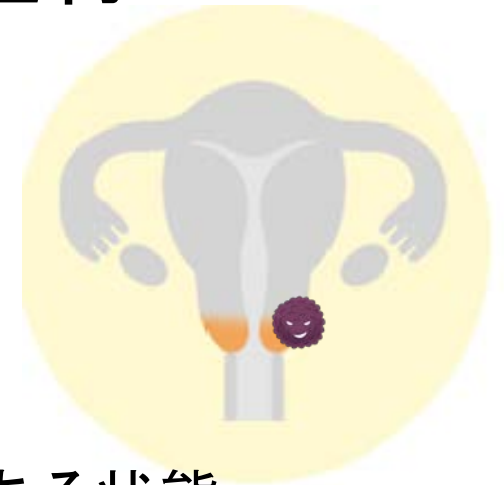
子宮頸がんの発生と進行

子宮頸がんの病気の発生の過程は

- ・異形成：がんの前の段階
- ・上皮内がん：子宮頸部の表面だけにごんがある状態
- ・浸潤癌：がんが周囲の組織に入り込み（浸潤）始めた状態

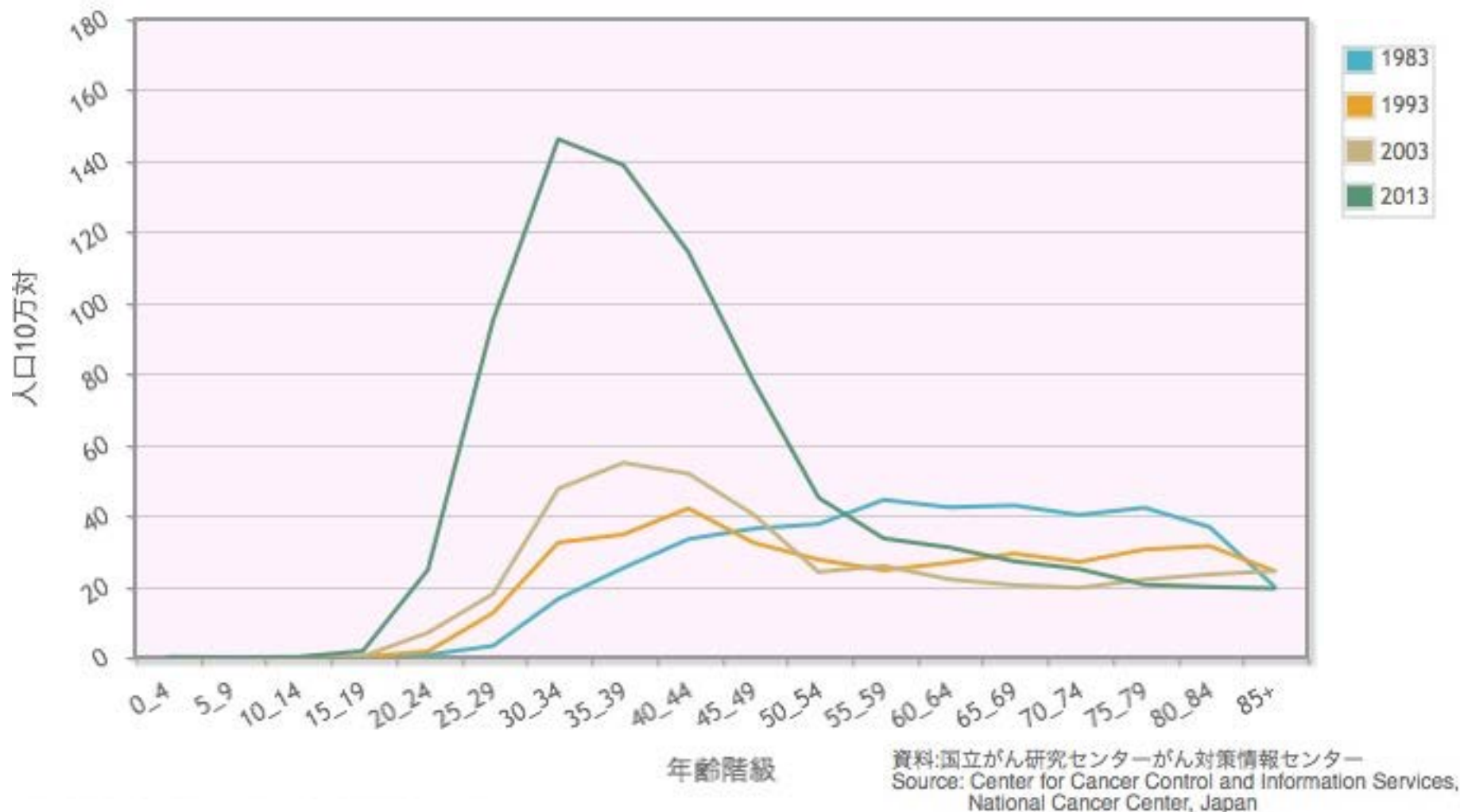
に分類されます。

婦人科診察や検診などで早めに発見することが可能です。



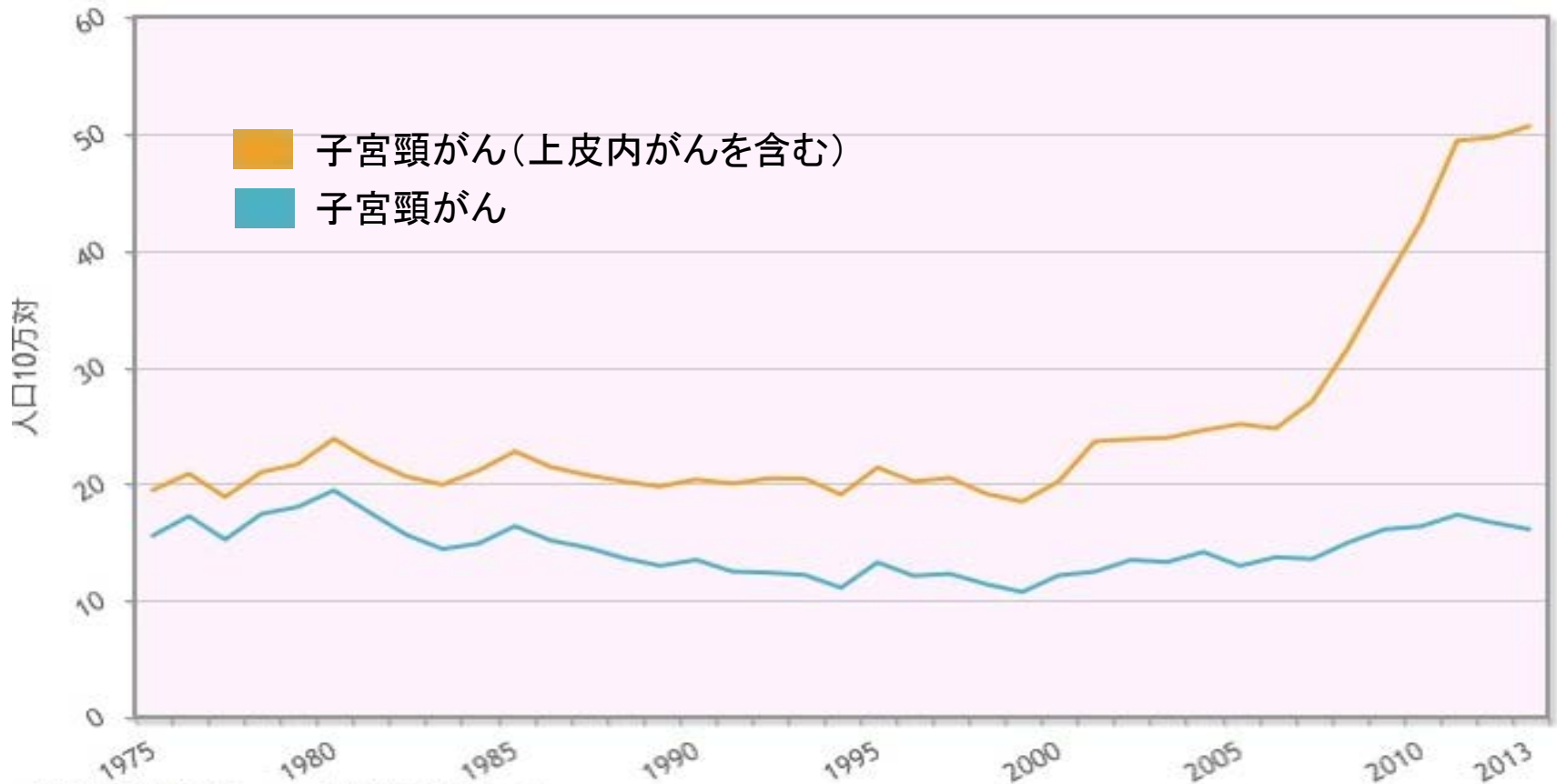
子宮頸がんの年齢別罹患率

子宮頸がん(上皮内がんを含む)の年齢別罹患率の推移を示しています。近年、40歳以下で急激に増加しています。



子宮頸がん罹患率

子宮頸がんと子宮頸がん(上皮内がんを含む)の罹患率を示します。近年、上皮内がんが増加しているといえます。



子宮頸がんの原因

子宮頸がんにはヒトパピローマウイルス（HPV）の感染が関与しています。HPVは性交渉で感染することが知られているウイルスです。若い女性に子宮頸がんが増加しているのは、性活動が活発な若い年代でHPVの感染機会が増えているためと考えられています。



HPVは100種類近くあり、そのうち15種類が子宮頸がんと関連があります。HPV感染そのものはまれではなく、感染しても多くの場合、症状のないうちにHPVが、排除されると考えられています。HPVが排除されないで感染が続くと、一部に子宮頸がんの前がん病変や子宮頸がんが発生すると考えられています。

HPVワクチン



子宮頸がんの原因の多くを占める2種類のHPVの感染を予防するワクチンが、2009年から使用可能になっています。

しかしながら、ワクチンは

- ・子宮頸がんの原因となる全てのHPV感染を予防するものではありません。
- ・子宮頸がんの治療薬でもありません。
- ・定期的な子宮頸がん検診の代わりとなるものではありません。

ワクチン接種に加え、正しい子宮頸がんの知識を持ち、何よりも早期発見のために子宮頸がん検診を定期的に受診することが重要です。

子宮体がん

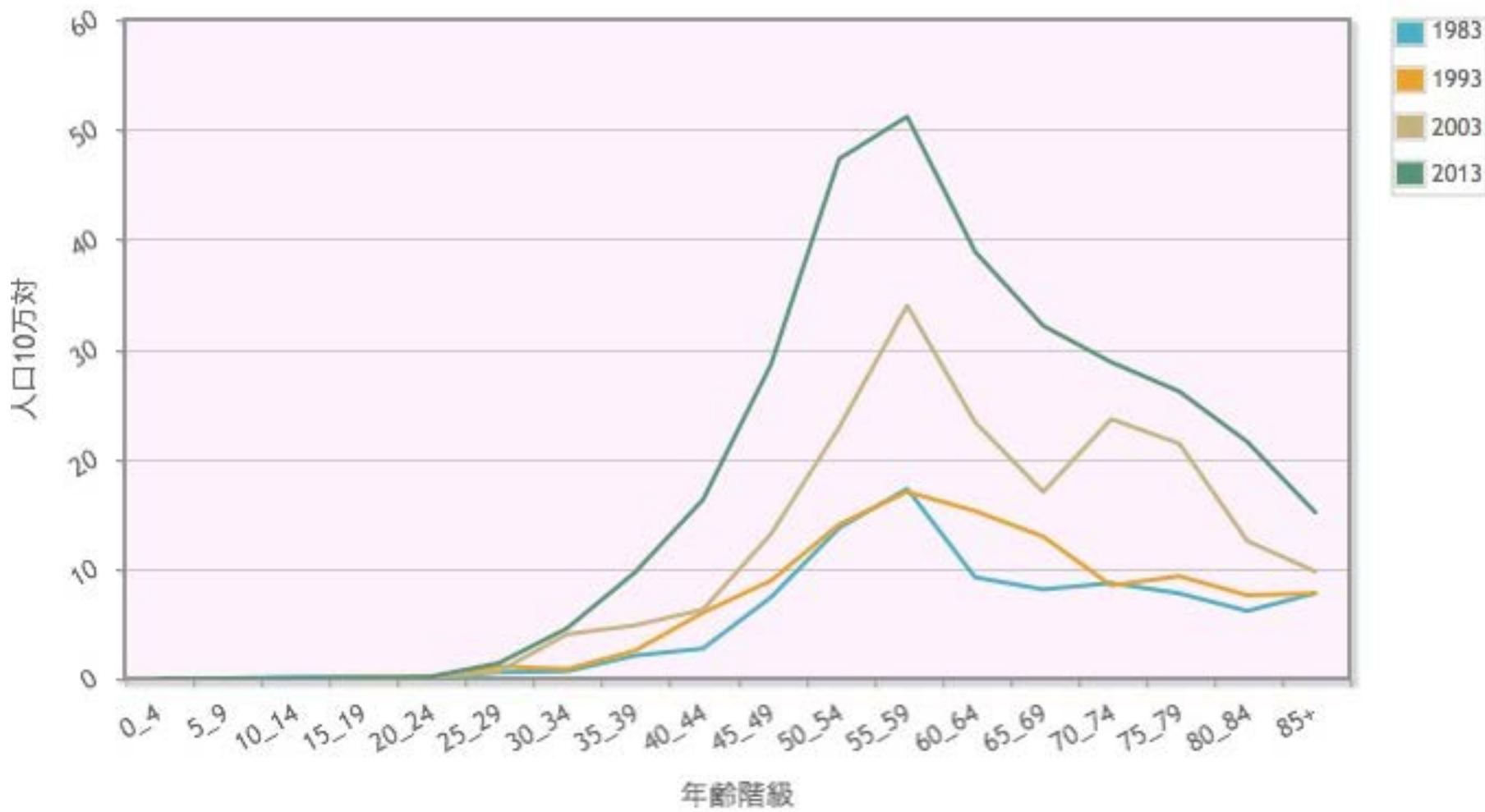


子宮体がんは、病状が進行していない早期の段階で出血を来すことが多く、不正性器出血での発見が約90%とされています。少量でも出血があれば、すぐに医療機関を受診することで早期発見が可能です。

多くの子宮体がんの発生には、エストロゲンという女性ホルモンが深く関わっています。エストロゲンには子宮内膜の発育を促す作用がありますので、エストロゲンの値が高い方では子宮内膜増殖症という前段階を経て子宮体がんが発生することは知られています。出産したことがない、肥満、月経不順（無排卵性月経周期）がある方などがこれにあたります。

子宮体がんの年齢別罹患率

子宮体がんの年齢別罹患率の推移を示しています。
50歳から60歳代で多く診断されています。
全ての年齢層で年々増加しています。



子宮体がん罹患率

子宮体がんの罹患率を示します。
子宮体がんが年々増加しています。




資料:国立がん研究センターがん対策情報センター
Source: Center for Cancer Control and Information Services,
National Cancer Center, Japan



子宮頸がんとう子宮体がん



	子宮頸がん	子宮体がん
子宮のどこの場所にできるのですか？	●子宮の入り口である頸部の上皮(表面の細胞)に発生します。	●子宮の奥にあたる体部のうちの内膜に発生します。内膜は生理のときにははがれてしまうので、閉経前の女性では子宮体がんの発生は多くありません。
何歳の人に多いのですか？	●30歳から40歳代で多く診断されています(10万人当たり130~140人)。 ●40歳以下で増えています。 ●2013年では約33,000人が診断され、約2,600人が亡くなっています。	●50歳から60歳代で多く診断されています。(10万人当たり40~50人)。 ●以前は少なかったのですが、全ての年齢層で年々ふえています。 ●2013年で約13,000人が診断され、約2,100人が亡くなっています。
どのような人がなりやすいのですか？	●ヒトパピローマウイルス(HPV)の感染が発がんとの強い関係があります。 ●喫煙者はリスクが高くなります。 	●閉経以降にリスクが高くなります。また、ホルモン補充療法を受けたり、子宮内膜増殖症があるとかかりやすいといわれています。 ●不規則な月経、無月経や排卵異常がある、また妊娠や出産の経験がない人がかかりやすいといわれています。 ●肥満、高血圧、糖尿病があるとリスクが高くなります。

まとめ

- ・同じ子宮のがんであっても、子宮頸がんとう子宮体がんは、特徴が異なります。
- ・子宮頸がんとう子宮体がんの違いを正しく理解することが大切です。
- ・がんを克服するには早期発見・早期治療が重要です。
- ・特に症状がなくても、20歳を過ぎたら、2年に1回子宮がんの検診を受けることが勧められています。
- ・心配な症状があれば、婦人科での診察を躊躇することなく受けることが大切です。



出典：国立がん研究センターHP
日本産科婦人科学会HP
日本医師会HP